

■第22回日本神経心理学会会長講演

## 司法神経心理学

渡辺俊三\*

**要旨:** アメリカにおいて、司法神経心理学は大きな波となっている。1986年ネブラスカ州オマハでの心理学学会の特集は、「司法神経心理学」であり、その後数冊の単行本が出版されている。1986年のゴールデンの司法神経心理学、1991年にはドエールによって、1995年にはバルシウカスによって、1997年にはマッカフレーによって著述されている。さらに、1999年には、司法神経心理学雑誌がホム編集長のもとで発刊を予定されている。最後に、アメリカの刑事責任能力の4つの判定について述べる。すなわち、マクノートンテスト、抗拒不能の衝動テスト、アメリカ法律協会テストあるいは模範刑法典テストなどである。

神経心理学 15; 2-8, 1999

**Key word:** 司法, 神経心理学, ルリア・ネブラスカ・カンファランス, 司法神経心理学雑誌, 心神喪失の抗弁  
forensic, neuropsychology, Luria-Nebraska Conference, Journal of Forensic Neuropsychology, insanity defense

### I はじめに

司法神経心理学は、現在のアメリカにおいて大きな流れとなっている。司法と医学と心理学の狭間に位置する学際的分野に属しており、きわめて不安定なものであるが、その足どりは確かなものである。

司法神経心理学の流れ(表1)について、1985年のルリア・ネブラスカ・カンファランス(Goldenら, 1986)にその黎明をみることができる。そしてその後、司法神経心理学の論文、単行本の出版がその成長を促し、そして1999年の司法神経心理学雑誌の出版が更なる大きな発展の前兆として期待される。以下、これら三つのエポックを中心に述べてみたい。

### II ルリア・ネブラスカ・シンポジウム

アメリカのルリア・ネブラスカ・シンポジウムで「司法神経心理学」が取り上げられた。1985年5月6日から11日までの6日間にわたって、アメリカのネブラスカ州オマハでルリア・ネブラスカ・シンポジウムが開催され、そこで「司法神経心理学」がその主題として取り上げられている。このルリア・ネブラスカ・シ

表1 アメリカ司法神経心理学の流れ

1986	Forensic Neuropsychology, Goldenら
1991	Forensic Neuropsychology, Doerrら
1995	Forensic Neuropsychology, Valciukas
1997	Forensic Neuropsychology, McCaffreyら
1999	Journal of Forensic Neuropsychology, Hom

1998年12月21日受理 [共同研究者: 目時弘文\*\*, 北條敬\*\*\*, 田崎博一\*\*\*\*, 大山博史\*\*\*\*\*]  
The Trends of Forensic Neuropsychologia in USA

\* 弘前愛成会病院, Shunzo Watanabe: Hirosaki Aiseikai Psychiatric Hospital

\*\* 黎明郷リハビリテーション病院, Hirohumi Metoki: Hiroshi Oyama: Reimeikyō Rehabilitation Hospital

\*\*\* 青森労災病院神経科, Kei Hojo: Department of Neurology, Aomori Rousai General Hospital

\*\*\*\* 弘前大学医学部神経精神科, Hiroichi Tasaki: Department of Neuropsychiatry, School of Medicine, Hirosaki University

\*\*\*\*\* 青森精神保健福祉センター, Aomori Psychiatric Health Welfare Center

(別刷請求先: 〒036-8151 青森県弘前市北園1-6-2 弘前愛成会病院 渡辺俊三)

表2 1986 ルリア・ネブラスカ・カンファランス

1	司法神経心理学 導入と概要
2	病前障害のある重度頭部外傷例
3	頭部外傷による認知障害と情緒障害
4	頭部外傷に続くアルコール症
5	頭部外傷後の軽度残遺状態の女子高校生
6	4年生児童の頭部外傷例
7	頭部外傷による失職
8	司法証人にとって必要な検査
9	ネブラスカ神経心理学シンポジウムの反省

ンポジウムはアメリカの心理学者にとって魅力的な研究会である。

このシンポジウムの結果は、モノグラフ (Goldenら, 1986) となっており、速報性を重んじてワープロ印刷の190頁の薄いものであるが、シンポジウムは1985年の5月で、翌年1986年には本になっている。

その内容をみると、表2のごとく9章から成っており、その内容は、ほとんど頭部外傷に関するものである。すなわち、司法神経心理学の対象疾患は、頭部外傷のような「器質性脳障害」に関するものである。そこでは、神経心理学者 (neuropsychologist) が専門的知識を有する証人 (expert witness) として価値あるということがここここで強調されており、この学問の黎明期における相当の意気込みを感じさせる。

### Ⅲ 司法神経心理学の論文、単行本

この1985年のネブラスカ・シンポジウムの後の流れをみると、司法神経心理学の論文、単行本が次々と報告、出版されている。論文については、本訳原書の文献覧を参照していただきたい。単行本は表1のごとく3冊の司法神経心理学の単行本が出版されている。

1986年のゴールデンらのもの (Goldenら, 1986) は、シンポジウムに関するものだが、その後、1991年にはドエルら (Doerrら, 1991) によって、1995年にはヴァルシウカス (Valciukas, 1995) によって、さらに1997年にはマックフレール (McCaffreyら, 1997) によって出版されている。

1991年の司法神経心理学は、ドエルとカー

表3 1991 司法神経心理学 ドエルら

第1編	神経心理学と法：構造と過程
第1章	司法神経心理学の法的基礎
第2章	発見の過程：宣誓 裁判 証言 弁論
第3章	初期接触での問題点
第2編	神経精神医学と神経心理学の見方
第4章	外傷と薬物中毒の神経病理と神経生理
第5章	脳傷害の神経学的検査と神経精神医学的検査
第3編	所見の解釈
第6章	病前の能力と先に存在した神経心理学的欠陥
第7章	処方薬物と非処方薬物の使用の結果
第8章	精神病理学的欠陥と神経病理学的欠陥
第9章	神経心理学的行為に影響する心因性要因：身体表現性障害 虚偽性障害 詐病
第4編	予後 治療 費用
第10章	成人の外傷性脳傷害：回復とリハビリテーション
第11章	脳傷害の保護費と経済的損失の予測

リンの共著で、副題として、司法的基礎と科学的基礎となっており、ギルフォードから出版されている。その内容をみると、表3のごとく4編11章からなり、前回のネブラスカ・シンポジウムのものより、はるかに体裁を整え、内容も充実している。第1編では法的問題を、第2編では神経精神医学と神経心理学の見方で、対象疾患は頭部外傷と薬物中毒としている。第3編では、所見の解釈として、病前と病後の知的能力、性格の変化について述べ、身体表現性障害と虚偽性障害と詐病の鑑別が重要視されるという。第4編では、予後、治療、費用など医療社会的事情が述べられている。

1995年には、本訳書の原書であるヴァルシウカスの司法神経心理学 (Valciukas, 1995) が出版され、1997年には、題名も神経心理学のみでなく、The Practice of Forensic Neuropsychology『司法神経心理学の実践』(McCaffreyら, 1997) となり、マックフレール、ウィリアムズ、フィッシャー、レングの4人の共著になっている。その内容 (表4) は、司法神経心理学者の役割、成人頭部外傷の司法的評価、民事法・刑事法における司法神経心理学など、大きな発展がみられる。

表4 1997 司法神経心理学の実際 マックフレー

第1章	司法神経心理学者：先例，役割，問題
第2章	成人頭部外傷の司法的評価
第3章	一般検査と特殊検査
第4章	軽度外傷性脳傷害
第5章	病前の知的機能と認知障害の判定
第6章	民事法における司法神経心理学
第7章	刑事法における司法神経心理学
第8章	生態学的妥当性と神経心理学的評価での問題点
第9章	臨床神経心理学的評価の範例としての司法臨床神経心理学
第10章	軽度脳外傷事例における非科学的神経心理学的証拠への戦略

表5 1995 ヴァルシウカス

第1編	まえがき
第2編	司法神経心理学の検査
第3編	器質性精神障害と司法関連
第4編	司法概念と原因

ここでは、ドエルとマックフレーの中間の1995年のヴァルシウカスの著書(Valciukas, 1995)に焦点を当ててみる。表題は「司法神経心理学」だが、副題として「概念的基礎と臨床の実際」となっており、頁数も最も多く341頁の大冊となっている。

ヴァルシウカスの司法神経心理学の内容(表5)は、4編21章からなり、その内容は、まえがき、司法神経心理学的検査、器質性精神障害と司法関連、司法概念と原因となっている。

バルシウカスによると、司法神経心理学の対象疾患は表6の11の領域である。

これら11の疾患群は、DSM-IVの分類(APA, 1994)では、器質性精神疾患(organic mental disorders)と物質関連障害(substance-related disorders)に相当し、ICD-10の分類では、F0の症状性を含む器質性精神障害(organic, including symptomatic, mental disorders), F1の精神作用物質による精神および行動の障害(mental behavioral disorders due to psychoactive substance use)に相当すると思われる。もちろん、DSM-IVでは器質性の用語は消失しており、「一般身体疾患による精神障害(mental disorder due to general medical condition)」と表現されている。

表6 司法神経心理学の対象疾患

1	精神遅滞
2	器質性精神障害
3	外傷以外の脳障害
4	外傷による脳障害
5	痴呆
6	エイズ関連の神経心理学的障害
7	薬物障害
8	アルコール障害
9	薬物と職場
10	感覚障害と認知障害
11	社会的不利

それでは、ヴァルシウカスの司法神経心理学の内容について、少しく概観してみたい。

司法神経心理学の定義として、「精神と行動の発現を、特に脳機能を中心とした神経系の事象と関連させて考察する学問」としている。「精神と行動の発現」という表現ですべての精神疾患を包含し、「特に脳機能を中心とした神経系」という表現で、いわゆる固有の精神疾患と器質性精神障害との差異を強調している。

司法神経心理学の研究者および専門的知識を有する証人としては、精神科医、神経科医、心理学者、言語療法士、作業療法士、看護婦その他精神保健専門家などをあげており、特に神経心理学者への期待が込められている。

#### IV 司法神経心理学雑誌

司法神経心理学の雑誌の話題に入る。名前は、司法神経心理学雑誌(Journal of Forensic Neuropsychology)で、出版社はヴァルシウカスの単行本出版と同じハワーズ・プレスで、創刊号は、1999年春に第1巻第1号出版が、季刊(quarterly)として出版される予定である。個人価格は\$50である。編集長はJim Hom, Ph.D. Dallas, Texasで、彼はテキサス州ダラスの神経心理学研究センターの創設者であり、所長でもある。

その雑誌の宣伝文句をみると、

①新刊の司法神経心理学雑誌は、司法関連の神経心理学的研究および話題の問題を網羅し、この領域の学術的知識の普及の中心的役割をはたす唯一の学術誌である。

表7 司法神経心理学雑誌

Journal of Forensic Neuropsychology  
 ハワーズ・プレス  
 1999年 春 第1巻第1号出版 季刊  
 個人価格：\$50  
 編集長：Jim Hom, Ph.D. Dallas, Texas  
 Founder and President, The Neuropsychology  
 Center

## 司法神経心理学雑誌の内容

- 1 新刊の司法神経心理学雑誌は、司法関連の神経心理学的研究および話題の問題を網羅し、この領域の学術的知識の普及の中心的役割をはたす唯一の学術誌である。
- 2 司法の領域で臨床神経心理学的知識の適切な使用について信頼できる適用を提供してくれる。
- 3 臨床神経心理学と司法の領域との情報交換となる画期的雑誌である。

②司法の領域で臨床神経心理学的知識の適切な使用について信頼できる情報を提供してくれる。

③臨床神経心理学と司法の領域との情報交換の場となる画期的雑誌である。  
 とあり、これからの動きが注目される。

以上、医学面ではDSM-IV, ICD-10, カプランの教科書原著、訳書1) 12) 7)を参考にし、司法面では、辞典10) 5) および刑事手続き法3)を参考にした。

## V 刑事責任能力

最後に、刑事責任能力(田中, 1991; Black, 1991; del Carmen Rolando, 1991; 福島, 1985)について、述べておく。

日本の刑事責任能力(福島, 1985)については、刑法39条「心神喪失者ノ行為ハ之ヲ罰セス②心神耗弱者ノ行為ハ其刑ヲ減輕ス」とあり、心神喪失、心神耗弱の意味は、昭和6年12月3日に大審院が下した判例で定義されている。すなわち、「心神喪失ト心神耗弱トハ孰レモ精神障礙ノ態様ニ属スルモノナリト雖モ其ノ程度ヲ異ニスルモノニシテ、即チ前者ハ精神ノ障礙ニ因リ事物ノ是非善悪ヲ弁識スルノ能力ナク又ハ此ノ弁識ニ從テ行動スルノ能力ナキ状態ヲ指

称シ、後者ハ精神ノ障礙未ダ上叙ノ能力ヲ欠如スル程度ニ達セサルモ其ノ能力著シク減退セル状態ヲ指称スルモノナリトス」とある。この判例は、精神障害という生物学的要件と、弁識能力(判断能力)と行動能力(制御能力)という心理学的要件の二面から判断する混合主義の立場をとっている。

ドイツ刑法(旧法51条)(Noval Morris)では、精神障害をさらに細かく規定している。「犯行時、行為者が、意識の障害のため、精神活動の病的な障害のため、または精神の薄弱のため、その行為が許されないことを弁別し、またはこの弁識にしたがって行動することができないときには、罪となるべき行為は存在しない」とある。

アメリカ(田中, 1991; Black, 1991; del Carmen Rolando, 1991)では、心神喪失の抗弁(Insanity Defense)は、裁判における憲法上の権利およびルールとして重要な問題である。犯罪の構成要件のなかには、犯罪の主観的要件と客観的要件の2つがあり、メンズレア(mens rea)は故意・過失などの犯罪上の主観的要件をいい、アクツスレウス(actus reus)は悪しき行為、犯罪行為で、犯罪上の客観的側面である違法行為である。前者により、心神喪失の抗弁が被告人の刑事責任(criminal liability)を免責する。犯罪の時に心神喪失(insane)であった被告人は、有罪に必要な故意(required intent)がないので、他の犯罪者と同様に処罰(punish)されるべきではない。David Bazelon 判事は、「われわれの共有する良識によれば、非難可能性のない場合(where it cannot be blame)に処罰(punish)することは許されない」といつている。心神喪失の抗弁は、殺人や謀殺(murder)事件においてよく使用されるが、全ての犯罪について主張でき、連邦および州の刑事事件で援用されているが、2つの州では廃止されている。

## VI 4つの心神喪失テスト(insanity test)

被告人が犯罪行為を犯した時心神喪失(insane)であったかどうかを判断するために、以下の4つのテストが様々な州において使用され

ている。

### 1. マクノートンテスト (M'Naghten Test)

マクノートンテストは、マクノートン準則ともいわれ、1843年のM'Naghten Caseでイギリスの貴族院の判示した刑事責任能力の基準に関する準則であり、犯罪行為の実行の時点において、被告人が、精神病の故に(as a result of a mental disease)理性を欠き、自分が行なっている行為が何であり、どういう性質のものであるかを知らず、また知っていても、その行為が悪いことであるということを知らなかったこと(accused did not know the nature and quality of his act; or he did not know that what he was doing was wrong)が、明白に証明されたときは、刑事責任能力なしとするものである。

このテストはアメリカ法律協会テストと並んで一般的なものである。

### 2. 抗拒不能の衝動テスト (Irresistible Impulse Test)

「精神病の結果、被告人が自己の行動や意味がわからなかった時、または悪いということを知っていたとしても行動をコントロールする能力を持たない場合(accused did not know the nature and quality of his act; or he did not know that what he was doing was wrong; or he did not have the ability to control his conduct even if he knew that what he did was wrong)」は、犯罪行為を犯しても刑事責任は免責される。

ただしコントロールを失ったことが精神病(mental disease)に由来するものでなければならず、単なる怒りや嫉妬、自発的に酩酊状態(anger, jealousy or voluntary intoxication)になったことはこの範疇に入らない。犯罪者がその行動を犯す衝動を制止することができず、警察官がそばにいたとしても行動したであろうと思われるものであることから、このテストはある法律家達の間で「警察官の側」のテスト(policeman-at-the-elbow test)と呼ばれている。このテストは多くの州で用いられ、場合によってはマクノートンテストの補足テストと

して使用される。

### 3. アメリカ法律協会テストあるいは模範刑法典テスト (American Law Institute Test or Model Penal Code Test)

精神病あるいは精神障害に侵された結果、被告人が「自分の行動が悪いことであるということを理解できず、あるいは法律の命ずるところに従って自分の行動を規制するための実質的能力が欠如している場合には(the accused lacked substantial capacity either to appreciate the wrongfulness of his or her conduct to the requirements of the law)」犯罪行為を犯しても刑事責任は免責される。このテストは、被告人が自分がしたことが悪いことであったとする根本的認識の欠如を要求していない。必要なのは、被告人が善悪の認知または法の要求する行動を行なうことができる「実質的能力」(知識の完全な欠如ほど厳格でない)の欠如を示す証拠である。

このテストは、「マクノートンテスト」と「抗拒不能の衝動テスト」を統合したものであり、全ての連邦裁判所および25の州で使用されている。

### 4. ダーラムテストまたは結果テスト (Durham Test, Product Test)

「その者の行動が精神病または精神障害の結果(his or her action was the product of a mental disease or defect)」であれば、犯罪行為を犯しても刑事責任は免責される。この基準は、被告人が精神病でなければその行動を犯さなかったであろうと思われる程度であるが、このテストは現在ほとんど使われていない。

## VII 心神喪失の抗弁の比較

刑事司法研究所(National Institute of Justice)の「犯罪研究ガイド」(Crime File Study Guide)で、Noval Morrisは表8のように比較要約している。

## VIII まとめ

アメリカの司法神経心理学の流れ、ネブラスカ・シンポジウム、司法神経心理学の単行本の

表8 モリスのまとめ (del Carmen Rolando, 1991; 佐伯, 1994 を改変)

テスト	精神病に関する法的基準	最終的立証責任	立証責任の所在	好み	使用している州の数 (変形して使用している州の数)
マクノートン	自分が何をしているか知らず, 自分が行っていることが悪いことであることの認識がない	弁護側による可能性の均衡による証明から検察官による合理的疑いの余地のない程度の証明まで様々である		検察官	22 (7)
抵抗し難い衝動	自分の行動をコントロールできない				0 (4)
ダーラム	精神病により引き起こされた犯罪行為	合理的な疑いの余地のない程度	検察官	弁護側	0 (0)
アメリカ法律協会 (模範刑法典)	自分の行動の悪性を理解し, または自己の行動をコントロールする重要な能力の欠如	合理的な疑いの余地のない程度	検察官		25 (3) 全ての連邦裁判所
現在の連邦法	自己の行動の悪性を理解する能力の欠如	明確かつ説得力のある証拠	弁護側		

紹介, 雑誌司法神経心理学の出版について述べ, 最後にアメリカの心神喪失の抗弁の4つのテストについて述べた。

付記 本稿は, 第22回日本神経心理学会総会での会長講演の一部であり, その際に出版した訳書 (Valciukas, 1995, 渡辺ら訳『司法神経心理学』) の序と内容が重複していることをお断りする。講演では, 4事例の事例検討を報告したが本稿では割愛した。

### 文 献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed), DSM-IV. American Psychiatric Association, Washington DC, 1994 (高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸訳: DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 東京, 1996)
- 2) Black HC: Black's Law Dictionary, with Pronunciation, Abridged sixth edition. St. Paul, Minn. West Pub., USA, 1991.
- 3) del Carmen Rolando V: Criminal Procedure: Law and Practice 2nd. Wadsworth, Inc., USA, 1991 (佐伯千仞訳: アメリカ刑事手続法概説—操作・裁判における憲法支配の貫徹, 第一法規, 東京, 1994)
- 4) Doerr, HO and Carlin AS: Forensic Neuropsychology, Legal and Scientific Bases, The Guilford Press, New York, 1991
- 5) 福島章: 精神鑑定—犯罪心理と責任能力—, 有斐閣, 東京, 1985
- 6) Golden CJ and Strider MA: Forensic Neuropsychology, Luria-Nebraska Symposium on Neuropsychology. Plenum Press, New York, 1986
- 7) Kaplan HI, Sadock BJ, Grebb JA: Kaplan and Sadock's Synopsis of Psychiatry, Behavioral Sciences / Clinical Psychiatry, 7th edition. Williams and Wilkins, Baltimore, 1994 (井上令一, 四宮滋子訳: カプラン臨床精神医学テキスト DSM-IV診断基準の臨床への展開, 医学書院, 東京, 1996)
- 8) McCaffrey RJ, Williams AD, Fisher JM et al: The Practice of Forensic Neuropsychology, Meeting Challenges in the Courtroom. Plenum Press, New York, 1997
- 9) Noval Morris: Insanity Defense, Criminal

- Study Guide, Washington DC : National Institute of Justice, from 13)
- 10) 田中英夫：英米法辞典，東京大学出版会，東京，1991
- 11) Valciukas JA : Forensic Neuropsychology, Conceptual Foundations and Clinical Practice, The Haworth Press, Inc. New York, 1995 (渡辺俊三，目時弘文，北條敬ら訳：司法神経心理学，医学書院，東京，1998)
- 12) World Health Organization : The ICD-10 Classification of Mental and Behavioural Disorders. World Health Organization, Geneva, 1992 (中根允文他訳：ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン—，医学書院，東京，1992)

## The trends of forensic neuropsychology in USA

Shunzo Watanabe\*

\*Hiroasaki Aiseikai Psychiatric Hospital

You can see the new trends of "Forensic Neuropsychology" in the United States.

The Luria-Nebraska Conference was held in Nebraska in 1985. After then, the four books on Forensic Neuropsychology were published for fifteen years. They are "Forensic Neuropsychology" by Gordon and Strider in 1986, "Forensic Neuropsychology, Legal and Scientific Bases" by Doerr and Carlin in 1991, "Forensic Neuropsychology, Conceptual Foundations and Clinical Practice" by Valciukas in 1995 and "The Practice of Forensic (Japanese Journal of Neuropsychology 15 ; 2-8, 1999)

Neuropsychology" by McCaffrey, Williams, Fisher and Laing in 1997.

Journal of Forensic Neuropsychology will be published in 1999, and its chief editor is Ph. Dr. Jim Hom.

Additionally, the author introduces four Insanity Defenses in USA, which are M'Naghten test, irresistible impulse test, American Law Institute test or Model Penal Code and Durham test or product test.